

令和5年度第31回全国高等学校生徒商業研究発表大会
審査委員長講評

令和5年11月22日

皆さん、発表お疲れ様でした。そして、入賞した皆さん、おめでとうございます。
審査講評として、審査の過程で気づいたことをいくつかお話しいたします。

はじめに、講評の前提として理解しておいていただきたいことがあります。審査は研究発表を対象としたもので、各校の皆さんが日々行っている実践の良し悪しを審査しているわけではありません。そして、研究発表に対する審査についても、コンテストという形式をとっているから順位をつけているだけです。相対的な順位というぐらいの意味合いで捉えていただければと思います。

審査委員の中でも話題になりましたが、発表は、各校それぞれの個性、持ち味を生かしており、大変素晴らしいものでした。しっかりと事前の準備をして、この広い舞台を使って、成果を発表できていたと思います。特に、10分という制限時間を有効に使い、台本を読み上げるのではなく説明すべき必要があることを説明していたことは、各校とも非常に優れていたと思います。このような前提でもって、審査講評を聞いていただければと思います。

なお、講評は、特定の学校について説明するものではありませんので、これから言うことのいくつかは当てはまらない学校があり、いくつかは当てはまる学校があると思います。自分の学校のことでないと思ったとしても、今後の参考にしていただきたいと思います。

最初に、全体的な印象をいくつか述べます。

先ほども言いましたが、各校とも非常に優れた実践を重ねていたと思います。審査の結果に関わらず、地域社会に主体的に関わって、解決に向けて、様々な人と協働するという活動、取組を継続してください。

今回発表された実践の多くが、地域の課題を捉えてその解決に関する取組でした。地域の課題を発見して、解決に向けて校内での活動に加えて地域の企業や関係機関と連携して、活動しているという流れでした。そのような中、地域社会の一つの核になる形で、商業高校の生徒たちが期待されていて、それに応えていくことができている。こうした活動は、商業の学びという意味で大変素晴らしいことだと思います。

そして、このような活動を継続する過程で、困難な出来事が生じても諦めずに、粘り強く、いろいろな解決策をいろいろな人と関わりながら模索していくことが繰り返されている様子が見受けられます。こうした粘り強さ、諦めずに解決策を提示し続けるという姿勢は、これからの社会で強く求められている資質であり、こうした取り組みが進められていることも大変素晴らしいことだと思います。

さらに、活動を進めていく時に、教室で学んでいる知識を単なる知識で終わらせず、教室外や学校外での活動とうまく結び付けて、それを活用している様子が見ること、加えて、活動する中で不足する知識が見えたときにそれを新たに学び直すという過程を経ている様子も見えました。学んだ知識を活かし、不足していたり新たに必要になったりする知識を学び直すという姿勢は、これからの社会を担う上で、最も重要な資質と言われているものの一つです。

今日の社会は急速に変化をしていますので、今学んで身に付けた知識が、5年後、10年後もそのまま役に立つとは限りません。このような社会の中で、皆さんは実践を通して、学び続けるということを経験しています。今後もその姿勢を忘れずに、常に学ぶということをしていただきたいと思います。

そして、これからもその姿勢を忘れずに、高校時代だけで卒業したら終わり、高校時代だけの経験ということではなく、できれば、卒業後も引き続き、地域社会の担い手として、課題解決に力を発揮し続けていただきたいと思います。

次に、気になったことを6点、お話しいたします。

1つ目、研究発表全体についてです。

本大会では、仮説を立てて検証し、発表するという形をとっています。その際、仮説というのは、現在の状況にある作用を加えたら変化していくであろうことを、あらかじめ理論的に予測したものをいいます。現状の分析を踏まえて、仮説が生まれてということになります。したがって、したいことが仮説になるわけではありません。

そして、仮説というのは必ず検証されなければなりません。検証されなければ、研究の結果が示されないことになります。検証した結果、仮説が正しい場合もあり、正しくない場合ももちろんあります。この時重要なのは、仮説の大きさ、仮説がカバーする範囲です。高校生が実践を通して、立証できる範囲というのは自ずと制約があります。高校生が在学中に検証できるものであるかどうかということが、この生徒商業研究発表大会の研究として求められる範囲ということになります。

極端な例を申し上げますと、高校生が何かをすると日本の少子高齢化が解決できるという仮説を立てたとしても、少なくとも皆さんが高校に在籍している三年間で実証できるものではありません。逆に、既にいろいろな場面で実践されていることをも仮説になりません。答えがわかっているからです。したがって、仮説の大きさや範囲をしっかりと検討する必要があります。

2つ目に、仮説の検証の方法についてです。

仮説は、先ほど言ったように必ず検証しなければなりません。そして、正しい場合もあるし、正しくない場合もあります。問題は、その検証をするにあたって、特定の一部のデータに殊更に注目したり、重きを置いたりすると、適切な検証ができなくなる可能性が出てくるということです。検証が適切でなければ、次の活動に向かう方向性を見誤る可能性が出てきますので、望ましいことではありません。検証するにあたっては、客観性のあるデータを大切にしながら、逆に反証するデータが少ない、あるいは存在しない、そのようなことも含めて吟味していく必要があります。

3つ目に、今回の各校の発表の中で、「ビジネスフレームワーク」と呼ばれているものを使っていたと思います。ビジネスフレームワークは、商業のいくつかの科目の教科書にも出てくる内容ですので、それを使うことは、教室での学びを実践に生かすと言う意味からすれば、非常に望ましいことです。

ただ、何種類かのフレームワークを組み合わせる時に、それぞれがどの程度関連しているかということをごきちんと踏まえておく必要があります。環境分析、SWOT分析、STP分析、ペルソナの設定、4Pを使っている学校が多くありました。それぞれは無関係で独立して存在しているのではなく、先に行ったものが次に影響するという流れで戦略を立案します。環境分析と無関係にSTPの分析はできないし、STPと無関係に4Pを設定することももちろんできません。関連性を踏まえて使っていくことで、漏れなく、ダブリなく、思考の偏りを避けて、有効な戦略を立てることがフレームワークを使う意味です。フレームワークの関連性や論理の組み立て方を意識して使えると効果的です。

4点目、研究報告書についてです。

研究報告書は、研究の成果・結果を読み手に正しく伝えることが一番大きな目的です。ここで問題なのは、装飾の程度です。色使いや枠組、写真やグラフ、いろいろなものを使っていますが、過度に使い過ぎると読みにくくなります。

文字のフォントサイズ、色についても同じです。必要な装飾をすることは否定しませんが、過度に装飾をすると焦点がわかりにくくなるということが起きます。

研究報告書の目的が、読み手に研究の成果を正しく伝えるという趣旨を考えた時に、何をどの程度使えばより伝わりやすくなるのか、ポイントが明確になるのか等に注意をする必要があります。

5点目、舞台発表についてです。

舞台で行うことも研究発表ですので、報告書と同じように、研究の成果、研究内容を適切に伝えることが一番大事な目的になります。適切に伝えるということは、厳密に言えば、聞いて

いる人たちに適切に伝わることです。舞台上に立っている人が何を伝えたいかということよりも、聞いている人が何を理解するかということが大事な要素になります。伝えたい側の都合だけで話せば済むということでもなく、聞いている側が適切に理解できるように、聞いている側が聴きたいと思う情報を的確に伝えることが必要になります。

これを踏まえて、舞台上で表示するスライドの問題です。これは説明資料という言い方をしますが、資料ですからスライドそのものが研究内容や研究の成果を説明するものではありません。あくまでも説明するのは話し手です。舞台上に立っている話し手が説明し、説明を補うためにスライドを使います。

話し言葉は一瞬で消えてしまいますので、それを一定時間、見える形で留める、あるいは、言葉で聞いているだけで分かりにくいものを視覚で理解を促すということのために、スライドを使うというのが本来の姿です。研究報告書と同様に、過度に飾り立てると、かえって伝えたい情報が伝わらないということが起きます。また、一枚のスライドを表示する時間についても注意が必要です。

6点目は、発音や発声、言葉の使い方についてです。

日本は、狭いとはいえ、各地に特有の言語文化を持っています。その地域の言語文化に基づいてアクセントをつけたり、イントネーションを変えたりすることは何の問題も無く、個人的にはむしろ奨励されるべきだと思っています。お話ししたいのはいわゆる共通語、標準語と言われるものを使う時のことです。共通語、標準語といわれる言葉には一定の法則がありますので、この法則に著しくずれた使い方をすると、聞いている側としては、やはり正しく理解できない可能性が出てくるということです。

文章の作り方の原則は、最初に主語、最後に述語になります。文章の中のアクセントを置く位置によって伝わるものが変わることがあります。正しく伝える、正しく理解してもらうためには、共通語や標準語と言われるものを使う場合は、その一般的な法則に従って話をするのが重要になってきます。

合わせて、声の大きさやトーンも、過度になるとかえって真意が伝わらなくなります。重要なところ、重要ではないところの区別がありますので、一定のペースで話せばいいというものではありませんが、極端に大きく、極端に小さく、というような使い分けをしたとき、受ける印象は人によって異なりますので、その極端さによって意図が正しく伝わらなくなる可能性があります。場合によっては、誤った理解に導く可能性も出てきます。このようなことも注意するとより効果的になります。

最後に、最初にも言いましたが、実践している内容や発表自体は、非常に素晴らしいものです。ですので、その取り組み自体は継続してください。研究発表に際して、どのような準備をするかについても諦めずに努力を重ねていただきたいと思います。そして、今回の経験を、これからの学校生活や、あるいは、その先の人生の中において、いろいろな形で生かしていただきたいと思います。

私からは以上です。